

転換期の花卉産業

—台湾の現状からみた日本—

奈良県農業試験場

栽培課長 長村智司

今年の1月、台北近郊で行われた国際鉢物研究会に招かれる機会があり、最近の台湾の花卉園芸事情を垣間みることができた。また、同行したオランダ、アメリカの研究者との交歓、および彼らの現地での反応を通じて、わが国の花卉園芸について少なからず感じるどころがあった。これらを概括してみたい。

1. 台湾の花卉園芸

1) 現在の生産

よく知られているように台湾の面積はほぼ九州と同じで、人口は2千万人強である。ただしサツマイモのような形の縦軸方向、東寄りに山脈が走り、山地を除いた場合の人口密度は世界有数である。1945年時点での人口が約500万人であることから考えると、台湾の人口が急増したことが判る。ちなみに、わが国の明治維新当時の人口が約3千万人で、それぞれ4倍に増加していることになるが、50年と130年の開きがある。複雑な政治はさておき、経済はわが国に続いて成長し、わが国に類似の経済構造を持つアジアの4つの竜のなかの中心でもある。GNP/人はわが国の3分の1程度であるが、外貨準備高/人はほぼ匹敵して

いる。今後、よりわが国に似た経済構造に近づくとみられる。

第1表 台湾の切花生産面積 (ha)

年	切花面積	キク	グラジオラス	バラ	チューベローズ
1985	1,846	1,105	290	78	55
1990	3,218	1,481	481	124	96
1994	4,919	1,860	824	204	115

台湾省イヤブック

花卉産業も第1表にみられるように飛躍的に成長している。現在、総生産額は約200億円で、そのうち切り花が生産額で60%、面積で約50%を占めている。キク切花面積は全体の約23%にあたる。生産額は我が国の約3.5%程度、国民一人あたりの花卉消費額は約500円程度で、わが国の約10%程度ではないかと思われる。

このうち電照によるキクは冬期に約6千万本がわが国へ大量輸出されている。わが国のキク消費の約2%にあたる。

一方、鉢物類の生産は第2表のとおり、大きな産業ではない。ただし、米中心の農業から、園芸作物への転換が積極的に行われており、鉢花の需

本号の内容

§ 転換期の花卉産業..... 1
—台湾の現状からみた日本—

奈良県農業試験場

栽培課長 長村智司

§ イチゴ新品種「栃木15号(仮称)の
養分吸収特性と全量基肥施肥..... 5

栃木県農業試験場 土壌肥料部

主任研究員 佐藤文政

要ののびも期待されている。自生植物でもあるフェレノプシスの育成、株、および切り花はその先駆けでもあり、わが国への輸出の増加は記憶に新しいところである。ラン類に加えてポインセチアの生産が多く、露地への植え込みを含めて、街中至るところでみかけられる植物でもある(写真1)。

写真1 ポインセチアの混植花壇



第2表 台湾の苗木、鉢物生産

年	苗木類		鉢物	
	面積	金額	面積	金額
	ha	億NT\$	ha	億NT\$
1985	989	5.6	117	1.0
1990	2,700	13.9	260	1.8
1994	4,036	17.1	383	3.4

台湾省イヤブック、1 NT\$は約4 日本円

2) ここ十年での変化

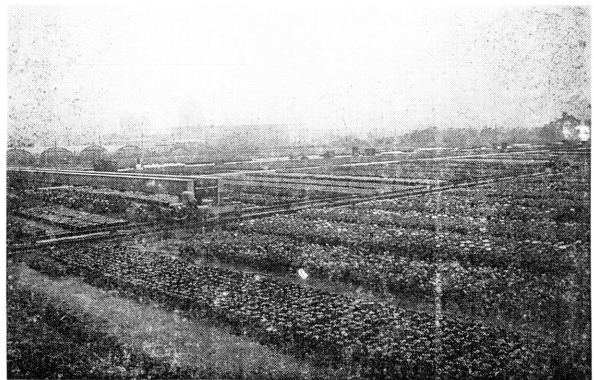
前回、約10年前訪問時、最も印象的であったことのひとつに世界中の新しい品種が集められ、栽培されていたことが挙げられる。これは台湾に品種登録制度がなく、国際的な法整備から除かれていた結果で、特にヨーロッパの最新種を観察することができた。多くの観葉植物を始め、ポインセチアなどの新しい品種をみることができた。今回も同様で、育種素材としてパテント品種が自由に利用されている状況であった。ただし、近い将来台湾も国際条約に加盟する方向で動いており、ようやく欧米並みに動きだしたわが国に、近い形になるものと思われる。

前回と明らかに異なっていたのは、外国製の肥料がかなり使用されていたことで、複合肥料、緩効性肥料とも、成分の安定しているものが普及しだしていた。培養土も同様で、海外からのピート

モス混合土が輸入されており、急速な変化が感じられた。

一方政府機関の奨励もあって、最近大規模省力型の施設、機器が登場している。台北近郊では花壇苗生産のモデル農場が発足しており、苗生産システムを完備した約2 ha の栽培が行われていた(写真2)。セル成型苗(プラグ苗)システムも積極的に取り入れられつつあり、大規模苗生産を行っている二例をみる事ができた。ただし現在のところ苗需要とのアンバランスが生じており、まだ端緒についたところの感があった。

写真2 花壇苗のモデル農場



小売りでは、少ないが高級店が街にみられ、センスのよいアレンジが行われている。デザイン教室を併設している店もあって、花の消費は増加しそうである。台北市内で土日に開かれるサンデーマーケットは高速道路下にある(写真3)。相変わらずの盛況であったが、ここを含めて、小売り価格がわが国より少し安い程度で、相対的に高いと感じられた。高級店ではオランダや日本からの輸入品も置かれていたが、価格はわが国とほぼ同様であった。

写真3 高架下のサンデーマーケット



3) シンポジウムの目的

鉢物産業を振興するために政府主催のもとで開催されたが、学会、生産者との連携が強く、結束の強さが感じられた。これはわが国の現状と大きく異なっており、参考にしなければならない点でもあった。

そのなかでの眼目は先進技術の吸収、および亜熱帯地域における気象条件の克服で、特に高温対策であった。欧米からの話題提供では、主に遮光による昇温抑制が強調されていたようである。夏期高温が対照になりやすいわが国の技術紹介は、欧米以上に興味を持たれたところであった。ただし鉢物に関連して、自動灌水システムでは耐暑法として毛管を有効に利用する方法を披瀝し、腰水（エブ・アンド・フロー）方式が高温状態では問題点が残ることを指摘したが、欧米の流行でもあり、また、自動灌水が当地で一般的でないこともあって、理解されていたかどうかは心許ない。

2. 日本の現状と今後

1) 欧米、日本のたどった道と台湾の現状

園芸先進国における花卉産業の発展は戦後の経済成長と歩調を併せてきたといつてよい。このなかには欧米とともにわが国を入れることも可能である。それぞれの地域が同様の経済状態のもとで花卉産業を育ててきたわけで、技術的な交流もほぼ同時進行してきたと考えてよい。しいて違いを指摘すると、アメリカ、オランダに代表されるような大規模型、またはプランテーション型と、わが国における既存の農業形態の延長型の違いが挙げられよう。わが国の品質に対する執着性や、品種を含む植物の多様性も欧米とは少し異なる点かもしれない。

しかし、経済的にそれより遅れて発展した諸国では、現状と、先進技術の間のギャップが大きくなる。中間の発展過程がないともいえよう。花卉園芸でも同様で、端的な例が今回見聞したセル成型苗にあてはまるかもしれない。先進国では既存の安定した需要、およびその伸びとシステムの定着が連動しており、それらがさらに新しい需要を作ってきた経過がある。

台湾の生産事情や街の風景の点描から、当地の花卉産業が発展途上で、ビジネスチャンスがかな

りあると思われた。先進国の例から判断すると、販売価格は今後着実に低下するものとみられる。鉢物生産農家でも、従来のわが国の生産者がそうであったように、温室内の植物の種類が多く、また開花期を揃えてローテーションを高めるといった発想からはほど遠いと感じられた（写真4）。低コスト化、大量生産、および高品質化などの観点からは大いに改良の余地がある。

写真4 鉢物生産風景



しかし、このような状態は少し前までわが国でも見られたもので、需要に見合った現状、形態であり、かえって、幸せな段階ともみることできる。生産と消費が拡大していく過程ではビジネスチャンスは多い。ただ、生産能力が上がり、一方で需要にかけりがみられるようになると、競争の激化が生じる。これは先進諸国一般にみられる現象で、展望がますます厳しくなる。これは事情が少し異なるものの、オランダ、アメリカ、わが国とも意見が一致した点でもあった。このように、台湾の現状からわが国の至り来たった道を見ることができた。

2) 国内消費と花卉産業の展開

第3表は少し統計が古いが、各国の花の消費額を示している。先進国といわれる地域での消費が大きく、とりわけ北国にその傾向が強いことが読みとれる。また、イギリスが意外と少なく、園芸文化の程度と消費額が必ずしも一致していないことに気がつく。

それでは台湾は、またわが国の花卉産業はどのような経過をたどるのだろうか。経済発展の時期にいくらかのずれがあるものの、いずれ台湾にも花卉消費の増加が見込まれる。ただし、四季がはっきりしているわが国とは少し異なった傾向にな

第3表 世界各国の花弁消費 (フロラカルチャ・インターナショナル:1995. 10月号)

国	花卉消費 /人 ¹	人口 ²	花卉消費 (百万)	GNP/人 ²	ビッグ マック価格 ³	都市人口 割合 ²
1. ノルウェー	\$146	0.42千万	\$613.2	\$22.83	—	75%
2. スイス	126	0.67	844.2	32.23	\$3.96	60
3. ドイツ	86	7.95	6,996.0	22.36	2.69	84
4. デンマーク	84	0.51	428.4	22.68	3.85	87
5. スウェーデン	79	0.86	679.4	23.76	3.20	84
6. オーストリア	78	0.77	600.6	18.98	2.84	59
7. イタリア	74	5.77	4,269.8	16.86	2.77	69
8. オランダ	70	1.50	1,050.0	17.55	2.85	89
9. フランス	58	5.65	3,277.0	19.52	3.17	75
10. ベルギー/ルクス (ルクセンブルグ)	56	0.99 0.04	554.4 22.4	17.56 29.98	3.10	97 84
11. アメリカ	50	25.00	12,500.0	21.79	2.30	75
12. 日本	44	12.40	5,456.0	25.89	3.77	77
13. ギリシャ	32	1.00	320.0	5.99	2.47	62
14. イギリス	29	5.74	1,664.6	16.06	2.65	89
15. スペイン	26	3.89	1,011.4	11.00	2.50	78

¹ オランダ花卉園芸局² 世界銀行、1992³ エコノミスト、ビッグマックの傾向 1994.4月

るかもしれない。台湾は、緑に恵まれた土地であり、緑がしたたり、年中街のあちこちに花が咲いている。かえって、都市による環境破壊が大きな問題点であり、この点ではわが国とよく似た状況にあるともいえる。

最近アメリカとコロンビアの間で、切花の輸出入に関して問題が生じている。流通の国際化は当然の成りゆきであり、消費、生産とも成熟した先進国では国際間の軋轢、国内生産の再編成が生じる。ただ、花卉産業の特徴として、製品が多様で

あることは救いであるかもしれない。特にわが国では用途、品質とも受け皿が多様であり、国際商品化した花卉類を含めて、次の時代が生まれる可能性を秘めている。

さらに、蛇足に近くなるが、生活、文化と緑のかかわり合いを示す指標として、消費高はそのひとつに過ぎないように思われた。台湾の生活レベルの高さや伝統、それにも増して感じた街の活力は、我々が失ってはならないものに違いない。